

47.

616-008.813

肝臟實質細胞ニ於ケル生體色素攝取
並ニ排泄ニ關スル一新知見補遺

岡山醫科大學病理學教室(田部教授指導)

田邊郁郎

[昭和8年8月7日受稿]

*Aus dem Pathol. Institut der med. Fakultät, Okayama.
(Leiter: Prof. Dr. H. Tanabe).*

Beitrag zur vitalen Farbstoffspeicherung und Farbstoffausscheidung der
Leberparenchymzellen.

Von

Dr. I. Tanabe.

Eingegangen am 7. August 1933.

Obwohl das Verhalten der Leberparenchymzellen gegen den parenteral eingeführten Vitalfarbstoff bereits oft untersucht wurde, herrscht bis jetzt doch noch keine Übereinstimmung in den Resultaten, solange die Forschungsmethoden verschieden sind.

Bei Ratten von 70–160 g. Körpergewicht injizierte Verfasser intraperitoneal 1,5 cc einer 4% igen Lithion-karminlösung pro 80 g. Körpergewicht unter leichter Aethernarkose. Die Tiere wurden in bestimmten Zeitintervallen von 20 Minuten bis zu 8 Stunden nach der Injektion getötet, die Leber wurde in 10% iger Formollösung fixiert und in Paraffin eingebettet.

Die Schnitte wurden einfach mit Hämatoxylinlösung gefärbt. Für die Endothelfärbung der Leberkapillaren wurde Eosin-Phosphormoribdensäure-Methylblaufärbung (Hamazaki'sche Modifikation) benutzt.

Aus diesen Experimenten ergeben sich zusammengefasst folgende Schlüsse:

1) Wenn man in die Rattenbauchhöhle eine ziemlich grosse Menge Lithionkarminlösung appliziert, so kann man eine Stunde nach der Injektion eine eigenartige "tropfige Farbstoffspeicherung" der Leberzellen feststellen. Diese Erscheinung wird bis zu 5 Stunden nach der Injektion allmählich deutlicher danach schwächt sie sich mit der Zeit aber ab und ist 8 Stunden nach der Injektion meist verwischt.

2) Diese "tropfige Farbstoffspeicherung" erscheint gern in den Leberzellen der Azinusperipherie, insbesondere in den Zellen, welche in der Nähe des Azinuskwinkels liegen.

3) Die Mehrzahl der Farbstofftropfen geht in die Blutkappilaren über und gerät in Zerfall oder wird von Sternzellen aufgenommen. Durch Eindickung der Eiweißgrundsubstanz werden die übrigen Farbstofftropfen als Pigmentgranula ausgeschieden, und die letzteren werden auf der Vacuolenwand sesshaft.

4) Aus Grund der oben angeführten Tatsachen kann man diese "tropfige Farbstoffspeicherung" als einen Abwehrvorgang der Leberzellen gegen die rasche, allgemeine Überschwemmung des von der Pfortader eingeführten Giftes ansehen.

5) Verfasser glaubt, dass diese "tropfige Farbstoffspeicherung" eine noch nicht beschriebene Form der vitalen Farbstoffspeicherung der Leberzellen ist. (Autoreferat.)

目 次

第1章 緒言	第5章 考按
第2章 文獻	第6章 結論
第3章 検査材料及ビ方法	文獻
第4章 實驗成績及ビ其ノ概括	

第1章 緒言

非經口的ニ動物生體內ニ輸入セラレタル色素ノ運命ニ就テハ、既ニ種々ナル検索ヲ遂ゲラレ、殊ニ Reticuloendothelialsystemニ於ケル色素攝取ノ狀況ハ闡明セラレタル所多シト

雖モ、色素注射後短時間ニ於ケル實質細胞、就中肝臓ノ夫レガ色素ニ對スル態度ニ就テハ其ノ検索未ダ十分ナラス、研究ノ餘地アルヲ思ハシム。

第2章 文獻

Michaelis (1900), Arnold (1901—1902) 等ハ夙ニ肝臓細胞ノ生體染色ヲ行ヘリ。1904年 Ribbert ハ家兎ニ就テ「リチオン—カルミン」ヲ反覆靜脈内ニ注射シ、各種臟器ノ實質細胞ニ於ケル色素攝取ノ狀況ヲ窺ヘリ、即チ肝臓ニ於テハ其ノ實質細胞内ニ「カルミン」顆粒ヲ認め、其ノ原形質内ニ於テ多角形又ハ不完全ナル圓形ヲ呈シ、胞體中央部即チ核ノ周圍ニ存ス。肝細胞ノ外、毛細血管内皮細胞モ亦強ク「カルミン」ヲ攝取シ、而カモ

腺細胞ヨリモ速カニ且強ク起ルコトヲ認めタレドモ、膽道毛細管及ビ膽道内ニ「カルミン」顆粒ヲ認めズ、從ツテ膽汁モ亦赤染セザリキト云フ。Schlecht(1907)モ亦同様ナル所見ヲ得、且膽道並ニ膽汁内ニ「カルミン」ヲ認めザルガ故ニ、肝臓細胞ハ「カルミン」排泄ヲ營マズ、尙ホ色素顆粒ハ肝細胞内ニ於テハ腎臟ニ於ケルヨリモ遅ク出現シ、夫レヨリモ角立チテ且大、核ノ周圍ニ存在スト。Schlemm(1912)ハ「トリパンブラウ」及ビ「ピロー

ルブラウ」ヲ「ラツテ」及ビ「マウス」ニ及覆皮下注射(30回)ヲ行ヒシモ、肝實質細胞ニ色素顆粒ヲ認めザリキ。之ニ反シ Knozynski (1922)ハ「マウス」並ニ哺乳期ノ「マウス」ニ於テ「トリバンブラウ」ト同時ニ「ペプトン」ノ非經口ノ輸入又ハ「レントゲン」照射ヲ行フコトニヨリテ、肝細胞内ニ色素ヲ證明スルコトヲ得タリ。Glasnow (1927)ハ海猿ニ於テ「トリバンブラウ」ニ毎日1回(體重250g)ニ就キ1%液(1.0cc)腹壁皮下ニ注射シ、既ニ兩3回ノ注射ニヨリテ、肝細胞内ニ於テ核周圍ニ色素顆粒出現シ、7日ニシテ連鎖狀又ハ念珠狀ニ擴大シ分岐セル小杆狀トナリ、30日ニシテ著明ナル網眼ヲ形成シ、其ノ他ノ胞體部ニハ常ニ色素ヲ認めズ、又腹道上皮ニ於テモ、其ノ毬子形ナルト圓柱

形ナルトヲ問ハズ、14日後ニ核上部ニ小圓形時トシテハ分岐セル顆粒ヲ認めタリト云フ、Suwelson (1928)ハ「ラツテ」、「マウス」及ビ海猿ニ於テ、「リチオン—カルミン」及ビ「トリバンブラウ」ヲ皮下、靜脈内及ビ腹腔内ニ注射シ、10—30日反覆ノ後、「トリバンブラウ」ニ於テノミ肝實質細胞内沈着ニ成功セリ。而シテ當初核周圍ニ於テ多角形ノ淡染セル小顆粒トシテ現ハレ、後漸次コレガ増大スルコトヲ認めタリ。而シテ本顆粒ノ出現ハ色素ノ全體、試験ノ持續、毎回ノ注射量ニ關シ、又色素攝取力ハ動物ノ種類ニヨリテ異ルコトヲ認ベタリ。清野ハ靜脈内注射ニヨリテ8時間後ニ於テ初メテ肝細胞内ニ色素ノ出現スルヲ認めタリト。

第3章 検査材料概及ビ方法

材料ハ體重70—160gノ「ラツテ」ヲ用ヒタリ。

注射液トシテハ4%「リチオン—カルミン」液、即チ Carminum puriss (Nacarat) II, Merckヲ4%ノ割合ニ Lithium carbonatumノ飽和液ニ混ジ、重湯煎ニ掛ケ溶解セルモノヲ使用セリ。

而シテ被檢動物ノ體重80gニ對シ前記溶液ノ1.5ccノ割合ヲ以テ、輕キ「エーテル」麻醉ノ下ニ腹腔内ニ注射シ、爾後20—30分ノ間隔ヲ以テ動物ヲ屠殺シ、肝臟ヲ取出シ、4倍「フォルマリン」液中ニテ固定、「アルコール」、「クロロフォルム」ヲ通ジテ、「バラフィン」包埋法ヲ施シタリ。

切片ハ厚サ3—5「ミクロン」トシ、「バラフィン」脱去後、稀薄ナル Delatfield 氏「ヘマトキシリン」液ニテ短時間染色シ、水洗後、脱水、「キシロール」ヲ經テ「バルサム」ニテ封鎖セリ。

尙ホ肝臟ノ血管壁ヲ染色スル目的ニテ「エオジ

ン」—磷モリブデン酸—「メチル」青染法(濱崎氏變法)ヲ行ヒタリ。即チ同法ヲ摘記スレバ、切片ハ可及的薄キヲ可トシ、「バラフィン」脱去後

1) 30分間1%「エオジン」液(但同液10ccニ對シテ水醋酸1—2滴ヲ加ヘタルモノ)中ニテ染色シ、次イデ蒸餾水ヲ以テ洗ヒ、更ニ

2) 1%磷「モリブデン」酸液ニ1—2秒間浸シタル後、蒸餾水ニテ洗フ。次ニ

3) 0.1%「メチル」青液ニテ5分間染色ノ後、蒸餾水ニテ瞬間水洗シ、

4) 95%「アルコール」中ニテ切片ヲ搖リ動かシツツ、切片ノ全體ニ均等ナル分別及ビ脱水ヲ施ス。最後ニ

5) 純「アルコール」、「キシロール」ヲ經テ、「バルサム」ニテ封ズ。

第4章 實驗成績及ビ其概括

記載ノ簡明及ビ彼此對照ノ便宜ヲ期スルタメ、次ノ表ヲ以テ示ス。

實驗成績概括

白鼠ノ腹腔内ニ「リチオン—カルミン」溶液ノ大量ヲ注入スル時ハ、注入後既ニ1時間ニシテ少數ナガラ肝細胞原形質内ニ淡紅色ノ蛋白滴狀物ヲ現ハス。本滴狀物ハ多クハ核ニ近ク存シ、内ニ微細粉末狀ノ色素顆粒ヲ認ム。

形ハ圓形或ハ橢圓形ニシテ、長徑平均6「ミクロン」ヲ算ス。滴ノ周圍殊ニ大ナルモノニ於テハ稍々宏キ透明ナル輪狀帶ヲ繞ラスモ、之ハ切片製作ニ方リテ滴ノ萎縮ニヨリテ生ゼシ人工的間隙ナリヤ、又ハ貪食サレタル異物ノ周圍ニ屢々認めラルル所謂 Verdauungszone ナリヤハ未ダ決定的組織像ニ接セズ。

注入後2時間、3時間及ビ4時間ニ於テ滴狀物ハ増加並ニ増大シ、大ナルモノハ15「ミクロン」ニ達シ、肝細胞胞體ノ殆ド全部ヲ占有シ、核ハ壓排セラレテ偏在セルモノアリ。

カカル肝細胞核ハ屢々變性ニ陥リ、萎縮或ハ破碎ヲ起セルモアリ。滴狀物ハ1時間ノ場合ニ比シテ一般ニ稍々著色度ヲ加フルモ、内ニ藏スル色素顆粒ニハ著明ナル増加ヲ來サズ、滴狀物ハ概シテ肝小葉周邊部ニ散在性ニ現ハルルモ、往々又集簇性ニ出現ス。1箇ノ肝細胞中ニハ通常1箇ノ色素滴ヲ有スルモ、稀ニ小ナル滴2箇ヲ有セルモアリ、然レドモ脂肪滴ニ於テ認めラルルガ如ク小滴互ニ癒合シテ大滴ヲ形成スルガ如キ像ニ接セズ、即チ滴ノ増大ハ個々獨立のニ起ルモノト想像セラル。

注入後5時間ヲ經タルモノニ於テハ、色素滴狀物中ニ稍々粗大ナル色素顆粒ヲ生ジ、蛋白基質ハ却ツテ褪色ヲ起シ、「ヘマトキシリン」ニ淡染スルモノアリ。更ニ時間ノ經過ト共ニ滴ノ中心部ハ褪色著明ニシテ透徹化シ、

終ニ空胞ト化シ、該空胞ノ周圍ニハ稍々粗大色素顆粒ヲ認ム。又時間ノ經過ト共ニ滴狀物ハ濃縮セラレ、終ニ圓形ノ色素塊ト化スルモノアリ。

5時間後ニ於テハ、屢々上記滴狀物ノ毛細血管中ニ遊離セルモノヲ認ム。滴狀物が如何ニシテ血管中ニ遊離スルニ至ルヤ、其ノ機轉ニ次ノ3様ノ方法アリ、即チ

第1法 滴狀物が肝細胞胞體內ニテ漸次増大スルニ際シ、最モ抵抗少キ血管腔ニ向ツテ膨出シ、其ノ部ニ於テ原形質膜ヲ破リ、滴周圍ノ透明輪ハ血管腔ト通ズルニ至ルモノナリ。斯ノ如キ滴狀物ハ云フ迄モナク10「ミクロン」以上ニ増大セルモノナル故ニ、縱令、血管腔ト相通ズルモ滴ハ毛細管腔ニ進出スルコトナク、血液ガ透明輪内ニ流入シ、滴ハ血液中ニ浮游サルルニ至ル。

第2法 滴ヲ有スル肝細胞ガ變性壞死ニ陥リ、上記類似ノ方法ニテ、血液中ニ浮游サルルモノナリ。

第3法 小ナル色素滴狀物ハ恐ラクハ肝細胞ノ有スル排泄作用ニヨリテ毛細管中ニ放出サルルモノナルベシ。小ナル滴狀物ハ時間(7—8時間)ヲ經過セル例ニ於テ、毛細管腔ニ稍々多數ニ認め得。

カクテ5時間以後ニ於テハ肝細胞中ノ滴狀物ハ漸次減少シ、注入後8時間ニ於テハ之ヲ見出スコト困難ナリ。

尙ホ滴狀物ト血管腔トノ關係ヲ精細ニ檢センガため、「エオジン」—燐「モリブデン酸—メチール」青染色ヲナストキハ、毛細管壁ハ繊細ナル青色線トナリテ認めラル、赤血球ハ光輝アル深紅色ニ染リテ檢索ヲ容易ナラシム。

實驗番 動號	11	37	4	19	38	3	28	10	41	6		
體 重	214	210	200	70	227	120	58	200	30	50		
注射 後 時 至 至 間	1/2時間		1.0	1 1/2		2.0		3.0	4.0	5.0		
肝 實 質 細 胞	變化ヲ 認メズ		散在性ニ少 數肝細胞體 内ニ多クハ 核ニ接シテ 極メテ淡キ 紅色色素滴 狀物ヲ認ム 大イサ6「ミ クロン」周 圍ニ透明輪 ヲ現ハシ滴 中ニ極微細 ナル色素顆 粒アリ	胞體內 ニ色素 滴狀物 ヲ見ズ		間質ニ近キ肝實 質細胞體內ニ前 記同様ナル透明 輪及ビ色素顆粒 ヲ有スル色素滴 狀物(6—15「ミ クロン」)アリ。 色素滴狀物ノ大 ナルモノハ肝細 胞體ノ殆ト全部 ヲ占有シ、核ハ 之ガタメニ偏在 性トナリ又認メ 難キモアリ。其 ノ數多クノ場合 ハ1箇ニシテ稀 ニ2箇ヲ算ス。 色素滴ヲ有スル 肝細胞ハ多クハ 散在性ニ存シ、 好ンデ小葉間質 ニ近キ小葉周邊 部ニ發現ス		前記部位ノ 肝細胞ハ稀 ニ細胞核大 乃至赤血球 大ノ色素滴 狀物ヲ有ス ルモノアリ		色素滴狀物 甚ダ多數。 組織像ハ N.3 及ビN. 28ニ類似ス		前記部位ノ肝細胞 ノ多數ノモノニ色 素滴狀物ヲ認ム。 色素滴ハ平等淡紅 色ナルモノアレド モ、過半數ハ内ニ 微細不規則ナル色 素顆粒ヲ見ル。此 如キ顆粒ノ現ハレ タル色澤セルガガ 一般ニ紅色セルガ 如シ、又滴狀物ハ 淡ク「ヘマトキシ リン」ニ染色セラ レ、紅色ノ殆ト認 メラザルモノアリ。 又稀ニ色素滴空 狀物形成セルモア リ。大ナル色素滴 狀物ヲ有スル肝細 胞原形質ノ一部ニ 菲薄トナリ終ニ破 レテ毛細血管腔ト 交通シ、透明輪中 ニ赤血球ノ流入セ ルモノアリ
星 芒 狀 細 胞	變化ヲ 認メズ		胞體ハ腫大 シ、中ニ極 微細ナル色 素顆粒アリ	一般ニ 胞體腫 大シ、 中ニ非 常ニ微 細ナル 色素顆 粒アリ		間質ニ近キ星芒 細胞ハ腫大シ、 微細ナル顆粒ヲ 多數ニ有ス		同 前		間質殊ニ隅角部ニ 近ク多數ノ星芒狀 細胞ハ腫大シ、色 素ヲ強ク蓄取セリ		
血 管 及 ビ 毛 細 管	細血管 内ニ微 細ナル 「カルミ ン」顆 粒ヲ見 ル		血管及ビ毛 細血管内ニ淡 紅色ヲ呈ス ル蛋白塊稍 々多量 形 不正形、大 小不同	同 前		稀ニ淡紅色ノ蛋 白塊ヲ見ル		血管内ニハ 多量ノ淡紅 色ナル蛋白 塊アリ		毛細血管内ニ色素 滴狀物ガ肝細胞ヨ リ逸出セルヲ見ル		

15	20	25	18	36	21	22	7	8	45
218	75	95	95	58	89	82	160	260	50
5.25	5.40	6.0			6.20	6.40	7.0	8.0	
<p>稍々多數ノ肝細胞ハ淡紅色中等大ノ色素滴狀物ヲ有シ、多クノ場合ハ門脈枝ニ近接セル部ニ存ス</p>	<p>少數ノ肝細胞内ニ色素滴狀物ヲ見ル</p>	<p>中等數ノ色素滴狀物ヲ見ル。其ノ或者ハ濃縮サレ色素顆粒ノ著明ニナレルモノアリ。又毛細血管内ニ逸出シ、星芒狀細胞ニヨリテ攝取サレタルモノアリ</p>			<p>同 前</p>	<p>色素滴狀物少數、肝細胞胞體中ニ少數ノ生體染色顆粒ヲ認ム</p>	<p>肝細胞内ニ色素滴狀物ヲ見ルコト稀ナリ、色素滴ノ中心部ハ褪色透徹化シ周邊部ニ色素顆粒ヲ現ハスモノアリ。所々肝細胞相互間又ハ毛細血管腔ニ面シテ之ト交通スル空胞アリ、其ノ壁ニ色素顆粒沈着セルモノアリ</p>	<p>色素滴狀物及ビ上記ノ空胞全ク不明 肝細胞内、星芒狀細胞内及ビ毛細血管腔内ニ於テ少數ノ色素滴ヲ見ル</p>	
<p>同 前</p>	<p>同 前</p>	<p>同 前</p>	<p>同 前</p>	<p>同 前</p>	<p>星芒狀細胞ノ胞體内ニ稍々大ナル空胞ノ存スルヲ見、其ノ胞壁ニハ「カルミン」顆粒沈着セリ</p>	<p>星芒狀細胞ハ著明ニ腫大シ、多量ノ色素顆粒ヲ有ス又前記類似ノ空胞ヲ有スルモノ稍々多數</p>	<p>星芒狀細胞色素顆粒ハ益々増加ス。カカル細胞ハ小葉ノ周邊部ノミナラズ中心部ニモ多數散在ス</p>		
								<p>血管腔ハ比較的擴大セリ「エオジン」—「モリブデン」酸—「メチール」青染色ニヨリテ肝細胞ガ毛細血管ト交通シ、色素滴狀物ガ毛細血管腔ニ逸出セントスルモノ、既ニ逸出セルモノヲ認ム。形ハ圓形4—8「ミクロン」帶青色「カルミン」色ヲ呈ス</p>	

而シテ血中ニ陥レル滴狀物ハ、一部ハ星芒狀細胞ニ攝取サレ、一部ハ血中ニテ崩壊スルモノナルベシ。

本實驗ニ於テ「リチオン—カルミン」腹腔内注入後、肝細胞ニ於テ最初ニ認めラルル生體色素攝取ハ上記色素滴狀物ノ出現ナリ。即チ色素注入後既ニ1時間ニシテ認めラレ、星芒狀細胞ノ生體色素攝取開始ト殆ト時ヲ同ジクスルモノナリ。然レドモ本法ニ依ル色素攝取ハ一過性ノモノニシテ、大部分ハ再び血中ニ滴狀物ト共ニ放出セラレ、色素顆粒又ハ塊トナリテ肝細胞體中ニ留マルハ極一少部分ニ過ぎズ。而シテ注入後6時間40分ヲ經過セシ例ニ於テ、肝細胞體中ニ散在性ニ「カルミン」色素ノ小顆粒ヲ極少數ニ認め、其ノ後時間ノ經過ト共ニ著明ナル色素攝取ヲ營ミ、肝

細胞中ニ稍々平等ニ散布サレタル粗大ナル色素顆粒ヲ認ムルニ至ルモノナリ。是即チ從來知ラレタル肝實質細胞ノ生體色素攝取ニシテ、余ノ此所ニ述ベシ甚ダ早期ニ出現スル「滴狀色素攝取」トハ自カラ別アリ。

星芒狀細胞ニ於テハ、注射後1時間ニシテ肝細胞ヨリモ稍々強ク「カルミン」ヲ攝取シ當初ハ homogen ナレドモ、漸次小顆粒狀ニ現ハレ、原形質ハ強ク腫大シ、時間經過ト共ニ其ノ數ヲ増シ、主トシテ小葉間質ノ隅角部ニ出現ス。注射後6—7時間ニ於テ、其ノ胞體ニ空胞ヲ有スルモノモ認めラレ、又肝細胞ヨリ逸出シタル色素滴狀物ヲ貪喰セルモノモアリ。注射後8時間ニシテ益々其ノ數ト強サヲ増シ、管ニ小葉ノ周邊部ノミナラズ、内部ニ於テモ認めラルルニ至ル。

第5章 考 按

文獻ニ徴シ、生體色素注入ノ肝臟ニ對スル作用ヲ按スルニ、固ヨリ動物ノ種類ニヨリテ異ルベキモ、大要次ノ3様ノ關係ヲ示ス。

1. 星芒狀細胞ヲ顆粒狀ニ染色ス。
2. 肝實質細胞ヲ染色ス。
3. 膽汁内ニ出現ス。

而シテ此3者ガ互ニ如何ナル關係ヲ持スルモノナリヤ、又如何ナル要約ニヨリテ發現上種々影響セララルモノナリヤハ未ダ全ク明カナラズ。

膽汁内ニ色素ノ排泄セララルコトハ既ニ1866年 Chrzonszczewsky ガ Indigoschwefelsaures Natron ヲ血中ニ注入シ、之ガ高濃度ヲ似テ膽汁中ニ排泄セララルコト認メタ

リ。サレドモ Goldmann(1909) ハ Trypanblau ヲ膽汁中ニ證明シ、此際肝臟中最モ多量ニ色素ヲ攝取スルモノハ星芒狀細胞ニシテ、

腺細胞及ビ膽道上皮ニ色素顆粒ヲ認めザリシヲ以テ、色素ハ之等細胞ニ無關係ニ血液中ヨリ擴散性ニ直接膽汁中ニ移行スルモノニシテ、色素排泄ニ關與スルモノハ星芒狀細胞ナルベシト云ヘリ。而シテ v. Uollendorff(1916)モ亦家兎肝ニ於テ多數ノ酸性色素ヲ試験シ、其ノ囊瘻管ヨリ採取セル膽汁中、擴散性ニ富ム色素程高濃度ニ出現スルコトヲ認め、且肝實質細胞ハ色素排泄ニ與ル所無カルベシト推定セリ。

之ニ對シ多田氏(1926)ハ肝臟ノ色素排泄ヲ

營ムモノハ星芒狀細胞ニ非ズシテ肝實質細胞ナリ即チ同細胞ノ分泌機能ニ因ルモノナリト結論セリ。

蓋シ膽道上皮又ハ肝實質細胞ノ染色ト肝臟色素排泄トヲ同一視スルコトハ不合理ニシテ實際膽道上皮毛細管ヲ少シモ染色スルコトナクシテ膽汁中ニ析出セララルル色素ハ多數ニアリ、又一定細胞ガ色素ヲ攝取スルト否トハ當該細胞ノ基礎物質ト其ノ色素トノ親和力ニ關スルモノニシテ、色素排泄ト色素攝取トハ常ニ並行シテ行ハルベキモノニ非ズ。

生體染色ニ關スル從來ノ記載ニ從ヘバ、肝臟ニ於テ最早ク色素攝取ヲ營ムハ星芒狀細胞ニシテ、色素注入後1—3時間ニ於テ著明トナル。之ヨリ少シク遅レテ間質中ノ組織球ニ於テ色素顆粒ヲ著明ニ認メ得ルニ至ル。而シテ肝實質細胞中ニ色素顆粒ヲ現ハスハ注入後數時間以上ヲ要シSteckelmacherハ「トリヂン」青注入後8時間ニシテ本色素顆粒ヲ肝細胞内ニ認メタリト云フ。

然ルニ豫ノ實驗ニ於テハ色素注入後速カニ、星芒狀細胞ノ色素攝取開始ト殆ド同時ニ「カルミン」色素ハ可成大ナル滴狀物トシテ肝細胞原形質中ニ出現シ、内ニ微細粉末狀ノ色素顆粒ヲ現ハス。此色素顆粒ハ時間ノ經過ト共ニ著明トナルモ、大多數ノ滴狀物ハ色素顆粒ト共ニ再ビ血液中ニ遊離ス。然シ乍ラ一部ノ滴狀物ハ其ノ蛋白基質ノ濃縮ヲ起シ、色素顆粒ハ小塊團トナリテ肝細胞體ニ長ク殘留シ、又滴狀物ノ空胞性變性ヲ起ス際ニハ一部ノ色素顆粒ハ空胞壁ヲナス肝細胞原形質ニ沈着ス。即チ肝細胞ノ滴狀色素攝取ハ一過性ノ現象ナルモ、内ニ含有スル色素ノ一部ハ色素

顆粒トシテ持續的ニ肝細胞内ニ殘留シ得ルモノナリ。尙ホ上記3種ノ様式ニ依テ色素滴狀物ガ肝細胞ヨリ血管中ニ出ルノ事實ハ特筆スベキ像ナリ。惟フニ肝細胞ハ細胞膜ヲ有セズ又肝毛細血管モ亦極メテ鬆疎ナル壁ナルガ故ニ、斯ノ如キ一見奇異ナル現象ヲ可能ナラシムルモノナルベシ。

人體肝實質細胞ニ於テ稀レニ大滴狀物ヲ證明シ得ルコトハ Wegelin ノ報告ニ徵シテ明カナリ。氏ハ實驗的ニ白鼠ヲ Käse 或ハ Kasein ニテ飼養シ肝細胞ニ於テ所謂 hyalintropfige Degeneration ノ像ヲ證明セリ。Gross 及ビ其ノ門弟 (Neuhaus u. Henry) モ亦白鼠ノ蛋白扁食ヲ行ヒ、其ノ肝組織ニ就キ Berg ノ Methylgrün-Pyronin 染色法、化學的蛋白ノ定量法及ビ Marburg 氏法ニヨリ肝組織片ノ酸素消費量ノ定量ヲ行ヒ、肝細胞體中ノ滴狀物ハ疑ヒモナク肝細胞ニヨリテ攝取サレタル蛋白質ナルコトヲ確證セリ。然ルニ生體色素注射ニヨリテ肝細胞中ニ大ナル色素滴ヲ證明セシハ、Steckelamacher ガ多數ノ實驗例中砒素ノ皮下注射ヲ並ビ行ヒシ家兎ニ於テ唯1回之ヲ經驗セシノミ、尙ホ又余ノ寡聞ヲ以テスレバ、細胞中ニ生ゼルカカル大ナル滴狀物ガ直接血管腔中ニ移行スルガ如キ機轉ハ生理的ニモ亦病理的ニモ未ダ記載セラレザル所ニシテ、興味アル事實ナリト云フベシ。

即チ本實驗方法ノ如ク多量ノ色素ヲ有スル門脈血液ガ肝臟ニ達スル際ニハ肝實質細胞ハ早期ニ「滴狀色素攝取」ヲ營ムヲ知ル。本滴狀物ハ爾後數時間ノ經過ニ於テ其ノ大部分ハ血液中移行スルモノナル故ニ、一過性ノ現象ニシテ門脈ヨリ肝ニ達セル多量ノ色素ガ一時ニ

全身ニ漲溢スルヲ防グ調節的保護機轉ト見做スベキモノナリ。

第 6 章 結 論

1. 白鼠ノ腹腔内ニ稍々大量ノ「リチオンーカルミン」溶液ヲ注入スルトキハ、注入後1時間ニシテ肝細胞ニ「滴狀色素攝取」ヲ認ム。本現象ハ注入後約5時間ニ至ルマデ漸次著明トナリ、其ノ後時間ノ経過ト共ニ減弱シ、8時間ニ於テ大體消失ス。

2. 該色素滴狀物ハ Glisson 氏鞘、殊ニ其ノ隅角ニ近キ肝細胞中ニ好シク出現ス。

3. 色素滴狀物ノ大多數ハ血液中ニ移行シ、其ノ一部ハ星芒狀細胞ニ攝取セラレ、一部ハ血液中ニテ崩壊ス。色素滴狀物ノ一部ノモノハ肝細胞中ニテ蛋白基質ノ濃縮或ハ吸收

セラレルコトニヨリ、色素ハ顆粒トナリテ原形質ニ沈着ス。

3. 此「滴狀色素攝取」ハ門脈血液中ニ一時ニ多量ノ色素ノ現ハレタル場合急激ナル色素ノ全身的漲溢ヲ防グ肝細胞ノ調節的保護機轉ト見做スベキモノナルベシ。

5. 本肝細胞ノ「滴狀色素攝取」ハ未ダ記載サレザリシ該細胞ノ生體色素攝取ノ一新様式ナリト信ズ。

終リニ臨ミ田部教授並ニ濱崎助教授ノ御指導ヲ深謝ス。

文

1) Berg, Biochem. Zeitschr. Bd. 61, S. 429, u. 435, 1914. 2) Chrowszczewsky, Vichows Arch. Bd. 31, S. 153, 1864. 3) Goldmann, Beitr. d. kl. Chir. Bd. 64, S. 194, 1909. 4) Glasnow, Zeitschr. f. Zellforsch. Bd. 6, H. 5, S. 773, 1927. 5) Gross, Verhandl. Bd. 21, 1926. 6) Gross u. Neuhaus, Zieglers Beitr. Bd. 77, S. 304, 1927. 7) Hamazaki, Fol. anat. jup. Bd. 4, H. 1, S. 32, 1926. 8) Hewy, Zentralbl. allg. Pathol. u. pathol. Anat. Bd. 54, S. 327, 1932. 9) Konstantinow, Zeitschr. f. d. gesamm. exper. Medicin. Bd. 55, S. 659, 1927. 10) 清野, 生體染色ノ研究, 第2版, 昭和4年. 南江堂. 11) 清野, 村上, 京都醫學雜誌, 第14號, 大正6年. 12) Lefehne, Milz und Leber, Zieglers

獻

Beitr. Bd. 64, S. 54, 1918. 13) Millendorff, Ergebn. der Physiologie Jg. 18, S. 141, 1920. 14) 松尾, 醫海時報, 第1530號, 大正12年. 及第1586號, 大正13年. 15) 西丸, 國醫雜, 第40年, 第8號, 昭和3年. 16) Ribbert, Zeitschr. f. allg. Physiologie. Bd. 4, S. 201, 1904. 17) Schlecht, Zieglers Beitr. Bd. 40, S. 312, 1907. 18) Schulemann, Arch. mikr. Anat. Bd. 79, S. 223, 1912. 19) Sawetsohn, Zeitschr. f. Zellforsch. und mikr. Anat. Bd. 8, H. 3, S. 602, 1929. 20) Steckelmacker, Zieglers Beitr. Bd. 57, S. 314, 1914. 21) 多田, 實驗消化器病學會雜誌, 第1卷, 第1號, 大正15年. 22) Wegetin, Verhandl. d. deutsch. pathol. Gesell. Bd. 18, S. 274, 1921.

附 圖 說 明

第1圖 白鼠第2號

「リチオンーカルミン」腹腔内注射後2時間 殺.

(T) 肝細胞中ノ5箇ノ色素滴

(G) 「グリソン」氏鞘

第2圖 白鼠第7號

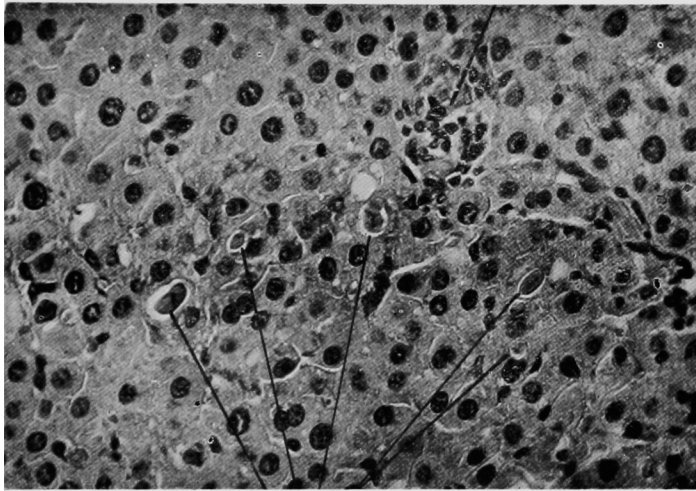
「リチオンーカルミン」腹腔内注射後7時間 殺.

(T) 肝細胞中ノ3箇ノ色素滴. 滴中ニ大ナル空泡ヲ生ジ色素ハ顆粒トシテ空泡壁ニ析出サレタルヲ見ル

田邊論文附圖

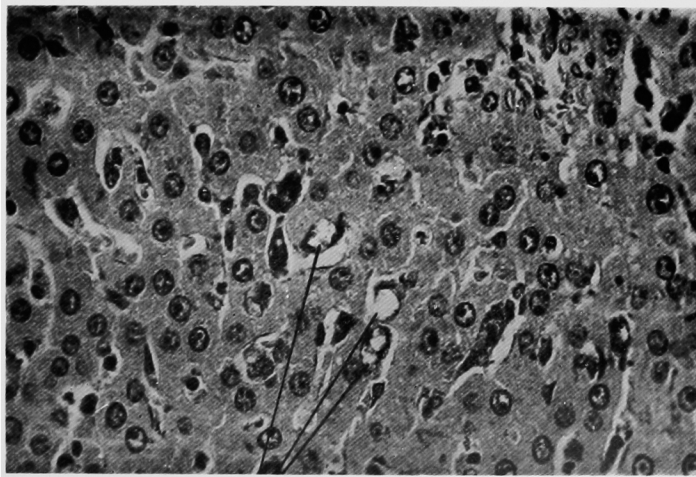
第 1 圖

G



T

第 2 圖



T